シンガポール

ジュロンレイクガーデン国際コンペティション 最優秀賞受賞プラン

Jurong Lake Gardens Central / East Redevelopment

The Winning Team [Japan+Singapore]

[JAPAN]
LANDSCAPE DESIGN INC.
KAJIMA CORPORATION
AVANT ASSOCIATES INC.

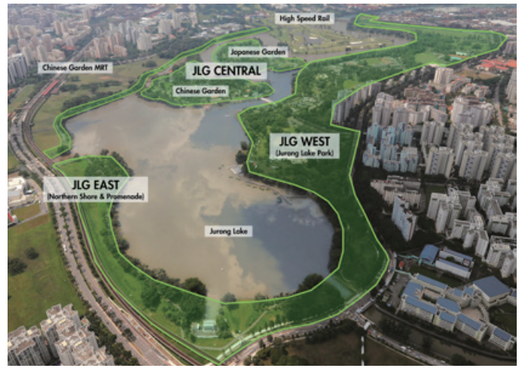
[SINGAPORE]
Salad Dressing
LIU&WO ARCHITECTS
AECOM Singapore
Davis Langdon KPK
CAMPHORA
NETATECH
LPA

所在地　1 Chinese Garden Rd Jurong East 地区
開発規模　Central : 27ha、East : 10ha（West : 53ha）
竣工予定　Central / East : 2020 年より順次オープン（West : 2018 年）
施　主　National Parks Board（NPARKS）
設　計　ランドスケープ／株式会社ランドスケープデザイン
ランドスケープ／SALD PTE LTD（Salad Dressing）
建築／LIU & WO ARCHITECTS PTE LTD
設備・構造・土木エンジニア／AECOM Singapore
積算／Davis Langdon KPK
環境技術・エンジニアリング／鹿島建設株式会社
エリアマネジメント／株式会社アバンアソシエイツ
生態／Camphora Pte Ltd
水環境／NETATECH ENGINEERING PTE LTD
照明／Lighting Planners Associates (LPA)

コンペ当時のマスタープラン

コンペ概要とチーム案コンセプト

文=一力 大智
株式会社ランドスケープデザイン



Jurong Lake Gardens 俯瞰

現在シンガポールを代表する国立公園は、世界遺産に登録された「Botanic Gardens（植物園）」及び、同国屈指の観光スポットとなった「Gardens by the Bay」の 2 つであり、これらに続き 3 つ目の国立公園となる「Jurong Lake Gardens（以下 JLG）」の再開発を目的とする国際コンペが 2016 年 3 月にシンガポール政府国家公園庁（National Parks Board Singapore、以下 NPARKS）主催で行われた。

Jurong 地区に 40 年前開園した「Chinese Garden」と「Japanese Garden」は地域住民の憩いの場として親しまれてきた公園だが、老朽化が進み来園者も減少していることから新たな公園整備が必要とされた。NPARKS は JLG を人々のための公園「People's Garden」として位置づけ、世界各国からプロポーザルを募った。

JLG が位置する「Jurong Lake District」は主要経済特区に指定されており、今後の再開発にとってこの公園再整備は重要な役割をもつことになる。それは周辺住民にとってだけではなく、マレーシアとシンガポールを結ぶ新高速鉄道の駅が計画されている「Lakeside Gateway」からの観光客と、商業・オフィス・行政機関が今後集中する「Jurong Gateway」で働く人たちにとっても貴重なオープンスペースとなるからである。

JLG は大きく West・Central・East の 3 つの地区からなるが、West は先行して計画が進められ、既に工事は開始し 2018 年に完成予定である。コンペでは Central の 2 つの島、及び、East の「Promenade」と「North Shore」の 4 つのエリアが設計範囲であるが、West・Central・East をいかに統合するか、周辺地区とのつながりをどう見直すかなど全体のプランニング力も求められた。

ランドスケープデザイン社は、世界各国から 31 チームが参加した一次審査でファイナリスト 6 チームに選出され、二次審査の結果、優勝者に選定された。

異なる領域を掛け合わせた “Ecotone”

ランドスケープデザイン社は水域と陸域の交わる水際が織り成す生物多様な空間のように、異なる領域を掛け合わせることでより豊かな空間が形成される“Ecotone”をコンセプトとしてとりあげた。

≪**人間活動×生態系再生** によるランドスケープデザイン≫

JLG では「人×水／自然」がいかに関係性をもてるかが必須テーマの一つであると認識し、両者が共存することでお互いのアイデンティティを高めあうような場の創出をした。特に原生植生にこだわり、植物の専門家でもある NPARKS に対して説得力のある植栽計画を行う必要があった。

≪**技術×自然** による環境技術の展開≫

沈砂池としての役割をもつ JLG の湖の水質改善も一つの課題として挙げ「環境技術による浄化×自然浄化」のハイブリッドにより水の美しさやその魅力を引き出す提案を行った。

≪**都市×公園** による管理運営手法≫

プログラムや空間のデザイン提案だけでなく、来訪者がこの公園をどのように活用していけるのか、周辺地域にどのような効果をもたらすのかに着目することも重要であると考え、官民連携による組織を設立し再開発地区の Jurong Gateway・Lakeside Gateway と JLG をつなぐためのエリアマネジメントの仕組みを構築した。

これらのコンセプトを実現するため専門性の高いチーム編成を行った。

チーム体制づくり

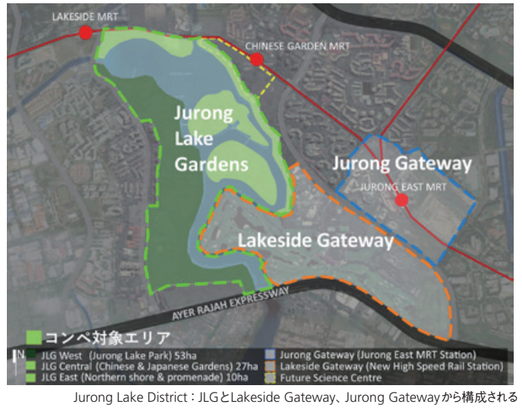
ランドスケープデザイン社は、鹿島建設と同関連会社のアバンアソシエイツをスペシャリストとして迎えることによって、デザインのみならず環境技術やエリアマネジメントの専門知識とノウハウを有する鹿島グループチームを日本国内で結成した。

また、現地のランドスケープ事務所 Salad Dressing、建築事務所 Liu & Wo Architects、エンジニアリング事務所 AECOM、積算事務所 Davis Langdon KPK に加え、スペシャリストとしてエコロジストの Camphora、水景エンジニアリングの Netatech Engineering と照明デザイナーの LPA Singapore と組織体制を整え、シンガポールのコンテクストを理解しているローカルチームと日本の高い技術力を兼ね備えたアライアンスでコンペに挑んだ。

サイトスペシフィックな提案

一次審査通過のファイナリスト他 5 チームには、イギリスの Gustafson Porter や Martha Schwartz, 中国の Turenscape などランドスケープ業界の第一線で活躍する事務所を含むチームが選出された。

強豪チームが残る中、我々が優勝案として選定された要因として、生物多様性を重視した提案、JLG でしか体験できない空間やプログラム「サイトスペシフィック」であったことが最大の要因であった。



Jurong Lake District : JLGとLakeside Gateway、Jurong Gatewayから構成される

シンガポールから見たジュロンコンペ

文= 會澤佐恵子 [SALD PTE LTD / Salad Dressing]

我々にとってのランドスケープデザイン

シンガポールは、「City in a Garden」を掲げ、人と自然が調和する先進都市として知られている。しかし、かつてはこの地も東南アジアを形成する熱帯雨林の森であった。小さなものから大きなものまで、多様な動植物が集まり、常に移り変わっていくその生命の営みは我々が生きる都市そのものと似ている。

都市においてはこれまで人間が自然を支配するという基本的構図が続いてきた。しかし、そうではなくデザインを通じて都市の中に「バイオダイバーシティ」（生物多様性）をつくりだすこと、それが我々が考えるランドスケープデザインのテーマのひとつである。このテーマの実現をNPARKS とともにプロジェクトチーム全員で目指している。

そして、もう一つ重要なテーマとして捉えているのが、大地に秘められた美しさをデザインするということである。それは、土地が発する声に耳を傾け、土地が表現したがっているものを出現させることである。

例えば水面の反射光を受け留める壁、水滴が水面に落ちたときにできる波紋やさざ波など、この手でつかむことができないものを生み出すこと。それは、それらを見たときに人それぞれに思い浮かぶ情景があり、個人それぞれがもつそのような記憶や感覚を、我々は呼び起こしたいと考えているからである。そして、いつも子供のような素直な気持ちで、遊び心のあるデザインをすること。ランドスケープデザインの基本はサイエンスであるが、それを詩に昇華させること—それが我々がこのジュロンレイクガーデンプロジェクトで最も念頭に置いていることである。

ガーデンとは何か

シンガポール 3 番目の国立ガーデンであるこのプロジェクトは、その名のとおり、公園ではなくて、「ガーデンをつくる」ということが目的である。ではガーデンとは一体何であるのか？

公園はより自然が管理されている場所であるのに対してガーデンはまず自然があり、自然の美しさを見せるために人間が手を加えていく場所である。自然の恩恵を受けながら、その中に人間の居場所を作っていくこと、そして熱帯のこの土地に生息する植物の魅力を最大限に引き出すガーデンをつくることがこのプロジェクトの重要なテーマである。

リリー・ポンド（Lily pond）：熱帯の植物を愛でる

このエリア南端にあるガーデンブリッジを渡り、南島に入るとまず目に飛び込んでくるのが色とりどりの睡蓮が浮かぶリリー・ポンドである。このリリー・ポンドは 3 段の棚田状に展開しており、様々なスイレン科の植物を見せる場所でありながら、最新のテクノロジーと知識を用いて、水を浄化しながらその水を再び湖に戻していくという仕組みを担っている。熱帯にはスイレン科にも葉が 5cm ほどの小さなものから直径 1m 以上に育つものまで様々である。それらの美しさが引き立つよう、美術館の展示空間のように、それぞれの個性に合った空間をしつらえてその風景を巡る楽しみのある場所とした。

ゴージュ（Gorge）：土地のコンテクストからデザインする

既存の敷地にある 4 メートルほどの小高い丘の地形を生かし、シダ植物や着生植物が息づくゴージュ（渓谷）を新たにデザインした。シダ植物などは気温 30 度以下、湿度 90%の環境が最も適している。この地表面の状態や植物の影響を強く受けて生じる微気候を創りだすために、小さな滝を全長 150m の空間のところどころに流す。また、丘の上には木陰や木漏れ日を生み出す樹木を配し、その下で水の流れる音を楽しんだり、水を見て涼しさを感じたり、植物と人間双方にとって気持ちの良い空間となるようデザインした。

他にも親水空間として子供たちが探検できるような水辺の小径を設けたり、大人がくつろげるカフェやレストラン、ウォーターギャラリーなどをプランニングに取り込んでいる。小さなひとつひとつの空間が集まって、大きな全体がいきいきとしてくるような、シンガポールの人々の誇りとなり、旅行者が本当の意味でのトロピカルガーデンを体験できるような新しいガーデンの姿をつくりたいと考えている。

設計業務のグローバル化と多様な価値･情報の共有

文= Alvin Liew [LIU&WO ARCHITECTS PTE LTD]
訳= 一力 絢

Jurong Lake Gardens (JLG) 国際コンペに参加するため、株式会社ランドスケープデザインは鹿島建設株式会社のシンガポール現地法人を通して Liu & Wo Architects にアプローチし、諸専門分野からなるチームを編成した。

シンガポールのこれまでのプロジェクトでは建築が主軸であり、周辺のランドスケープはほんの一部に過ぎない。ランドスケープの設計者がコンサルチームのメンバーにならない場合もあり、たとえチームに加わっていたとしても彼らに割り当てられる予算は決して十分といえるものではなかった。

この度当チームはコンペを勝ち取り、Liu & Wo Architects は日本のランドスケープデザイン社とシンガポールの Salad Dressing との密な連携のもとプロジェクトを推進している。ここでは建築ではなくランドスケープの設計が主軸となっているため、協働パートナーとしていかに対等に責任分担をするか、これがチーム稼働当初の課題であった。ランドスケープの設計理念が庭園のキューレーションの鍵となる要因であり建築設計がそれに準じる要素であることは、従来のプロジェクトにはない新たなアプローチといえる。

メールやウェブ会議、クラウドの活用によって価値と情報が共有されて新しいデザインが生まれている。他国の企業との協業はグローバル化を推進するものであり、デザインのアイディアやコンセプトについて多様な意見を交わす日々は新鮮な刺激に満ちている。庭園を整備していく際の技術面の検討作業においても、チーム内で各社の技術的資源と専門知識が展開される。

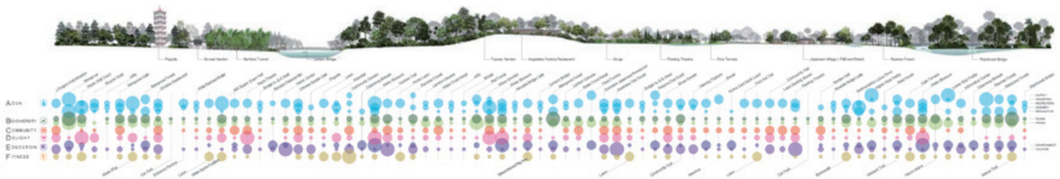
ウォーター･ウォール･コート：新しい水辺空間の創出とともに水質浄化の機能も果たす

リリー･ポンド：Lakeside Gateway（新高速鉄道駅予定地）からの来訪者を迎える

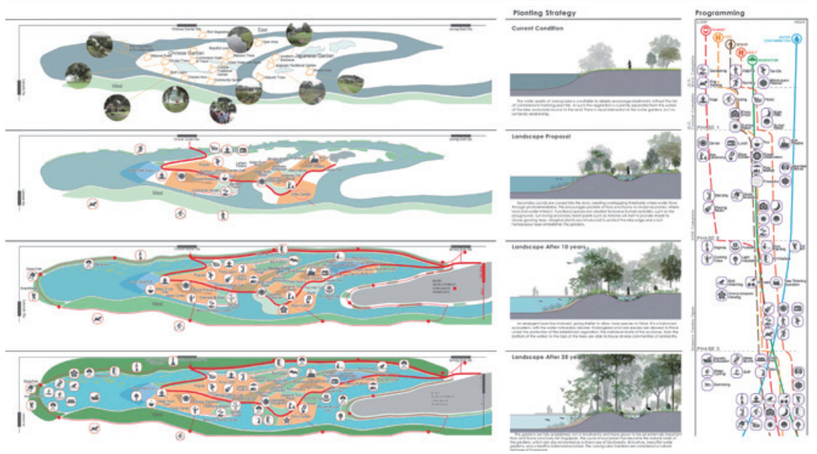
ゴージュ・カフェ：赤道直下の公園にクールスポットを実現する

ムーンランタンテラス：伝統行事のランタンフェスティバルをモチーフとした水辺のテラス

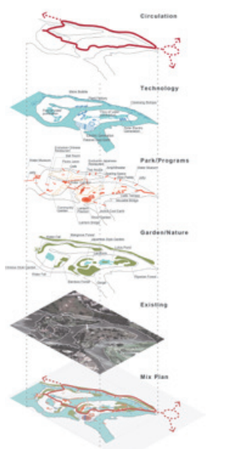
❶ Variety of Programmes and Nature



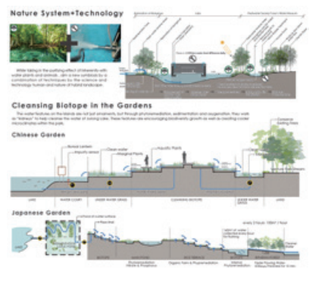
❷ Nature Succession and Future Projection



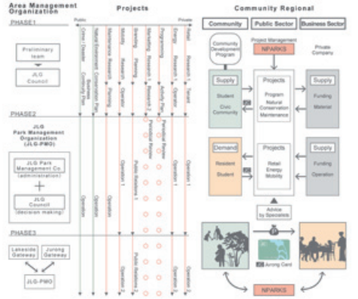
❸ Park Element



❹ Nature System + Technology



❺ Area Management



❶ Variety of Programmes and Nature
「水環境」「生物多様性」「コミュニティ」「教育」など多様な公園プログラムの重層化と計画エリアのマッピング

❷ Nature Succession and Future Projection
全体一括整備ではなく、場所のポテンシャルに基づく部分整備のタイムラインと、時間とともに充実する生物多様性がリンクしあう公園整備プログラム

❸ Park Element
環境資源、既存庭園施設、新公園プログラム、新サーキュレーションの重ね合わせによる統合的な場づくり

❹ Nature System+Technology
植物や土壌を利用したファイトレメディエーション技術と微小気泡技術を併用するハイブリッドな水質浄化技術

❺ Area Manegement
公園を行政・民間でマネジメントする組織組成の手法、および地域通貨による市民の公園利用の促進

（図版P.052-056：© National Parks Board,Singapore）

吉田謙一氏（以下、吉田。敬称略） 今回のコンペティション（以下、コンペ）で勝てたことには伏線があります。同じシンガポールで開催されたある国際コンペに参加したのですが、その際に我々と勝者との決定的な違いを目の当たりにしました。勝者となったチームはランドスケープの他、建築、構造・設備、照明デザインといったそれぞれの領域を専門とする人たちによるチーム体制を組み臨んでいました。これがランドスケープを主とする国際コンペの現実であると理解したわけです。

Chang Huaiyan 氏（以下、ファイヤン。敬称略） シンガポールにおけるコンペにおいて、チームアップが必要になったのは、おそらく7年程前からだと思います。その頃から国際的な意識が高まってきたこともあり、チームアップの必要性が増したのではないかと考えられます。最近では、意識的にチームアップが必要な要綱を盛り込んでいる傾向にあると言えます。

吉田 チームアップによりプロジェクトに取り組むこと、すなわち広い領域を統合的に扱う視点を持つことが、「ランドスケープ」という職能に求められていると理解しました。鹿島グループには様々な分野のスペシャリストがおり、そのメンバーに声をかけ、チーム編成をしました。詳しい要綱が発表される前に、お互いに何ができるかを探ることから始めています。程なくして要綱が発表されたのですが、そのひとつにシンガポールでライセンスを持つ建築／ランドスケープ事務所が加わることという条件があり、鹿島グループの現地法人事務所を通じてチャン・ファイヤンが率いる Salad Dressing と出会いました。

ファイヤン 吉田さんとは、我々の事務所で初めてお会いしたのですが、まったくの白紙状態でお会いしました。ただ、シンガポールも日本も同じアジアの国ということで、お会いする前から何も心配はしていませんでした。

吉田 ファイヤンさんがとてもオープンマインドで、初対面にもかかわらず我々を快く受け入れてくれてくれました。また、同事務所には日本人スタッフがいるということもあり、安心して組むことができるとその場で直感しました。そのような経緯もあり、最初は役割分担は決めずに、それぞれの考えを持ち寄ってつくりあげていくスタイルになりました。

ファイヤン ランドスケープデザイン社は大きなビジョンや仕組みから場の特質を考えていく、一方我々はディテールやヒューマンスケールで感じられる自然の美しさをシンガポールのコンテクストをベースに考える。それぞれが異なる方向から提案し、そのミートするポイントをお互いに探りながら見つけていくという方法を試みました。何度かミーティングを重ねる中で、そのポイントがなんとなく分かるような関係になりました。

吉田 全体の計画の中でどのようにプログラムやアクテビティをつくり出すかを我々が考え、それに対して Sald Dressing がそれぞれの場所をローカルに根ざしたデザインとして提案し、話し合いながらひとつのランドスケープをつくっていくというやり方ですね。

ファイヤン 言葉の違いも良い方向に作用したのではないでしょうか。英語と日本語で捉え方が異なることによって、新たな視点が生まれてきました。

吉田 言葉を完全なものとして捉えるのではなく、デザインを考えるツールのひとつでもありました。

ファイヤン 我々とランドスケープデザイン社が持っているアジア的な考え方は、互いの理解を深めるために重要でしたし、お互いが発信するデザインに興味を持ち、リスペクトしていたことも理解し合う上で大きな要因だったと考えています。ですからミーティングは常に No Fight でしたね（笑）。根底ではアジアという共通の思考を持ちながら、お互い異なるアプローチをしていましたので、ランドスケープデザイン社と刺激し合いながら新しい提案が生まれていきました。

吉田 アジア的な価値のひとつとして、場所へのコミットの仕方や場の在り方について、共感することが多かった。ある場所が持つ特性や、そこに立ち現れる美しさについて話し合い理解できたと思います。それは、ランドスケープが本来的に持つ「公共性」につながる内容であり、ジュロン・レイク・ガーデンを新たに「ガーデン・カルチャー」の実践の場としたい NPARKS のニーズに合致していたのではないかと考えます。計画の当初から、ファイヤンと私は決して「大振り」でアイコニックなデザインをおこなおうとは思わなかった。

ファイヤン 今回のジュロンは、周辺をローカルの住宅などが囲む場所です。ですので、ローカルの文化やネイティブな美しさを大切にする場所であると考えました。もともと日本が持っている文化のひとつとして、心に染みるとか心で感じるというものがあると思います。そういう感性が、ジュロンのコンペにおいてお互いに交じり合えたところでもあると考えています。お互いに完璧に理解し合うと思うのではなく、想像し感じることもランドスケープでは大事なことであると思います。今回のコンペは、私たちにとってとても良い経験になったと考えています。

（文責＝編集部）

ー座談会ー

互いの領域を認め合うことで生まれた フラットな組織が勝利を掴んだ

環境技術 **高砂裕之**（鹿島建設株式会社 技術研究所 地球環境･バイオグループ上席研究員）
グリーンインフラ **山田順之**（鹿島建設株式会社 環境本部 グリーンインフラ Gr. グループ長）
エリアマネジメント **森 正史**（株式会社アバンアソシエイツ 計画本部部長）
ランドスケープ **小池孝幸**（株式会社ランドスケープデザイン 取締役設計部長）

小池孝幸氏（以下、小池。敬称略） 今回のコンペでは、広い領域をカバーするためのチームづくりから始めています。鹿島グループ内の各専門部署に声を掛けメンバーを募り、それぞれがどのような提案ができるかということを事前にミーティングをし、その過程でそれぞれが担当するテーマを決めながら、コンペに向け始動しました。まずは、皆様の担当された領域の概要についてご説明いただこうと思います。

高砂裕之氏（以下、高砂。敬称略） 私は技術研究所という立場で参加しておりますので、我々が持っている技術の中で、今回のコンペに有効なものを広く提案していくことを心掛けました。主なところでは生物多様性と、水の浄化に関する技術提案、レストランに併設した植物工場などがあります。さらに風・温熱環境のシミュレーション、ICT の活用などについても提案しています。コンペの条件やキーワードに対し、技術研究所が持っている技術をどのように活かすか、そしてランドスケープデザインとどう融合させられるかということを考えていきました。

山田順之氏（以下、山田。敬称略） 我々環境本部の役割ですが、今回のコンペの話をいただいたときに、現在我々が取り組んでいます「バイオフィリックデザイン」はキーワードになると考え、提案に盛り込んでいます。そして、現場から出る自然素材を活用するためのリサイクルの仕組みについての提案をさせていただいています。これからの時代、国際コンペで勝つためには様々な分野のスペシャリストが集まらなければ難しいのではないかと考えています。ですが、国内に目を向けますと、まだまだ縦割りで行動することが多いため協業に対するハードルを感じることがあります。今回は、各専門分野から使える技術を単に選択するのではなく、部門を横につなぐことで付加価値の高いものがつくれるのではないかと、まず横糸をつなげるんだということにランドスケープデザイン社が強いリーダーシップを発揮したと考えています。

森 正史氏（以下、森。敬称略） 私どもは都市計画コンサルティングを主とした会社ですが、今回はエリアマネジメントに関わる提案をしています。このエリアは公園を核とした副都心の開発が計画されていますので、都市と自然環境豊かな公園がどう関わっていくべきか。そして公園を核として地域全体の発展をどうコントロールしていくかという命題をランドスケープデザイン社からいただき、公園の中で生まれるアクティビティをテーマにしながらコミュニティをつくり、それが協議会に発展していき、地区の発展とともに周囲の協議会とも連携するというような組織形成のプロセスを提案しました。そのほかに、人が関わることで時間とともに育っていくようなコンセプトのもと、持続可能な公園運営についての仕組みも考えました。

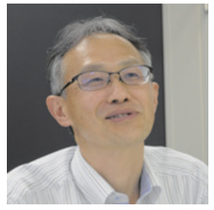
小池 ランドスケープデザイン社の役割は、海外の事務所も含めて高度な専門分野の方々の技術やデザインを最大限活かしていくため、それらをどのようにつなげていくかという仕事が中心となりました。今回は、技術とデザインが別々に動くのではなく、常に一体的に展開するランドスケープを目指したのですが、その点が高く評価されたと考えています。打ち合わせにおいても、技術分野からデザインに触れる提案があり、デザイン側はその考え方を受けてさらにブラシュアップしていくということもありました。環境技術、土木、都市計画、ランドスケープと縦割りで仕事を進めるのではなく、全員が同じテーブルでアイデアを出し合いながら形にしていくという進め方でした。本当にひとつのチームとして戦えたという実感があります。

高砂 環境については、ローカルパートナーの存在も大きかったです。例えば、植物を使った水質浄化や植物工場を提案したのですが、シンガポールのような熱帯での適用経験がありませんでしたので、ある意味リスクを伴うことになります。ですが、コンペに勝つためには特色のある提案も必要だという状況の中で、そのアイデアや技術が、果たして熱帯でも応用できるのか、受け入れられるかというところをローカルパートナーとキャッチボールをしながら提案を作り込んでいったのですが、それはいい経験でした。

山田 現地に行って新たな方向性が見えたという状況もありましたね。特に自然素材のリサイクルでは、竹の伐採が多くなりそうだとか、貝殻がたくさんあるという現実を知ることで、プレゼンの新たな要素として加えるとか、ブラッシュアップができたこともありました。

森 エリアマネジメントについては、例えばコミュニティとか生活様式のようなソフトの部分は現地に行かなければ得られない情報がほとんどですので、今回は Salad Dressing など現地の方とのコミュニケーションの中で、より明確な形をつくることができたところはあります。

山田 現地でのミーティングは刺激的でしたね。現地では、チームの皆さんとそれこそ 24 時間一緒にいて、常に打ち合わせをしているような感覚でした。食事の最中もやはりプレゼンの話になるわけで、本当に一つのチームとして同じベクトルを持って仕事ができていると感じました。また言葉の壁はどうしてもありましたが、それが逆に真意を理解するためにお互いに歩み寄るといういい方向に動いたと思います。地理的な距離とか、言葉、さまざまな専門分野が入っている混成チームであることなど、ともするとマイナスに働く要素がすべてプラスに働いて、従来にはない形でまとまったのかなと思います。


高砂裕之

山田順之

森 正史

小池孝幸

小池 今回は、国内のプロジェクトでは経験がないくらい、メンバーがフラットな関係の中で仕事ができたと思います。例えば、環境については高砂さんがリーダーとなり骨子をつくっていく、バイオフィリックデザインの話であれば山田さん、エリアマネジメントでは森さんというように、一人を頂点としたピラミッド型の組織ではなく、小さな山がいくつかあって、それが大きな山を形成しているという組織作りができたのではないかと考えています。ランドスケープはいろいろな分野を内包しやすいという特徴がありますが、それがいい形ででたのかなと思います。

森 我々も、これまでのプロジェクトでは経験がないほどいい環境の中で仕事ができたなと感じています。これについて検討して欲しいという限定された形ではなく、こういう方向で考えてほしいという、いい意味でファジーなご指示でしたので、逆に我々としても深く考えなければいけないと感じましたし、広い視野を持って提案することができたと思います。

山田 私は、クライアントである NPARKS が公園の可能性をよく理解されているのではないかなと感じていました。コンペのテーマの出し方が、ランドスケープを強く意識したものであるという印象を持ちました。NPARKS が、ランドスケープの活かし方をよく理解されていたので、ランドスケープに光を当てるようなコンペになったんだと思います。つまり、全体として付加価値の高い空間ができることが重要なわけですから、そのためにはランドスケープという切り口で物事を整理して提案なり議論することが最善の方法ではないかということを、クライアントサイドがよく理解していたのではないかと思っています。そういう点で、今回のコンペは特徴的であったと言えますし、参加する側もこれまでとは異なる組織体系を組むことができた要因のひとつではないかと感じています。これまでの縦割りの考え方では、通用しにくくなる時代に入ったとも言えるのではないでしょうか。

小池 ランドスケープという概念が広がってきていると感じます。建築や土木などは確固たる領域があると思います。ですがランドスケープは輪郭がはっきりしないがゆえに、様々な分野を内包するものになってきていると思います。

高砂 水質浄化にしても、熱や風の環境評価にしても、水はどうなるのか、熱、風はどういう影響を及ぼすのかということが、デザインをする段階でタイムリーに分かればそれを基にデザインをブラッシュアップしていくことができるのではないかと思います。また私たちがデザインの場に入っていくことで、技術面においてもさらなる開発、向上が図れるのではないでしょうか。

小池 おっしゃるとおりですね。例えば木を植える時に、ここにシンボリックに植えましょうと決めることも多いのですが、高砂さんに風の流れや熱環境のデータを提示していただくことで、どこに植えれば人に快適な良い環境を提供できるかという環境として理にかなったデザインを生み出すことができるはずですよね。

高砂 研究する側としても、ランドスケープアーキテクトが環境技術などを普通に使えるツールにまでブラッシュアップしていければと思いますし、研究者も展開の場を知ることで研究への取り組み方が変わってくるのではないかなと思います。

山田 研究者もそうですし、我々エンジニアの分野の人間にとって、データや数字は共通言語でもあるわけです。ところがデザインにおいてそれを共通言語にすることは難しいと思うんですね。今回のプレゼンには、トライアンドエラーはあったもののエビデンスベースでのデザインアプローチがふんだんに盛り込まれています。そういう意味では、データや数字を共通言語としてお互いに話せたのではないかと思います。また、今回ランドスケープデザイン社の吉田さん、小池さんの動きを見ていて、とても器用にしかもしなやかに仕事を進めているなと感じました。いわゆる植栽デザインだとかランドスケープ空間の話だけではなく、植物工場の「食」の話までやったりとか、マネジメントについてもかなり細かいところまで携わっていらっしゃいました。それは今回のプレゼンを象徴するものであり、ランドスケープのいいところが出せたのかなと思っています。

森 公共空間の場合、空間デザインだけではなくサービスとか、気持ちの良い体験をしていただくための仕組みですとか、さらにパブリックという視点で言えば防犯、防災という視点も入ってきますし交通という問題もあります。そこまで考えらえたランドスケープデザインは少ないのではないでしょうか。エリアマネジメントを通して、この公園を核に地域の価値が高まって、それによりその周辺の地価も上がって、経済的な効果を生む。これからは、そういう視点で都市公園が考えられていくんだろうなと、またその可能性を感じました。

山田 そうですね、今回は技術的な提案からデザイン、そして管理、運営まで提案している点は高く評価できると思います。また、日本に対する期待も感じました。特に、日本の企業はよく話を聞いてくれると。自分たちの意見を押し通すばかりではなく、クライアントが何を求めているかを察知し、柔軟に対応する調整能力に長けているのことが日本人らしいところなのかなと思いました。

小池 日本人の気質ばかりではなく、数年前からでしょうか「クールジャパン」という言葉がもてはやされて、日本の文化やデザインなどが世界から注目を集めていますよね。ランドスケープにおいてもその流れは来ているなということを今回のコンペを通して感じました。日本の技術やデザイン、ものづくりなど世界と勝負できるものが数多くあるなというのが実感です。今回のコンペを通して、今後のランドスケープのフィールドのひとつとして「海外」という選択肢は大いにあると感じました。皆さん、ありがとうございました。

（文責＝編集部）